

西川欽也氏の人と学問

中村隆英

もう一周忌もとうに過ぎたのに、西川君（私はつねに彼をそう呼んでいた。いまも非礼を顧みずそう呼ばしてもらうことにする。）が世を去ったという感じがしない。ヒョイと出てきて例の大声で元気よく話すだろうという思いが先に立つ。

私が西川君をはじめて知ったのは昭和26年、当時東大経済学部で増山元三郎先生が開いておられた私的な推計学のゼミナールにおいてであった。当時の聴講のメンバーには、林周二、広田純、宮下藤太郎、渡部経彦、大沢豊、竹内清、石黒隆司などの諸氏があった。私はその中の新米でかつ劣等生だったのだが、西川君は、新制東大の一回生として経済学部に進学そうそう、そこに参加したのである。

当時のテキストはたしかワルトの講義のプリントだったと思う。難しい本ではないのだが、レポートに当たった西川君は、入門的に表現してあるところを数学的に厳密に解説しようとするので、増山先生につっこまれ、何週間も黒板の前で苦闘していた。要領よくその場をしのぐことが嫌いで、徹底的にやり抜かないと気がすまない彼の性格は、そのころもはっきりあらわれていたと思う。

昭和28年西川君は、新制東大の大学院の統計コースに、第一回の、しかもただ一人の学生として入学した。有沢広巳、内藤勝の両先生、少しおられて宮沢光一先生などの専任の教官と松川七郎、津村善郎、斎藤金一郎など兼任の諸先生が、たった一人の——のちに田中穰二、中村貢氏らが入学したが——学生を教育されたのである。こんなに学生にとって贅沢だが、つらい教育もなかっただろう。当時の指導教官ははじめは有沢先生、御退官後は内藤先生だった。

内藤先生は西川君が教養学部時代からの恩師である。駒場時代の彼が、内藤先生のゼミでケトラーを読んでいるとき、何かと推計学の考え方をひいて議論をするので、どうもおかしいと思っていたら、ある日電車の中で彼が北川敏男教授の『統計学の認識』をひらいたまま、グググ寝ていたのでハハハと思ったというのは、内藤先生の一つの話である。駒場時代の彼は、また学生運動の闘士でもあったらしい。昭和26年秋、駒場の大ストライキの時、指導部の一人だったという話は本人からも内藤先生からも聞いたことがあるが、私は直接知らないで、「らしい」ということにしておくほかはない。大学院に入ってから彼の彼は、数理統計と社会・経済統計の両方を熱心に勉強しはじめていた。経済統計の方ではシャウプの国民所得論やレオンチェフの *Studies in Structure of American Economy* を読んだりしたのも、そのころである。当時の彼の暮らしは決してらくではなかった。毎晩、会計のアルバイトにいて、帰宅は12時近くなるのだという。それでいて昼間のゼミに出て報告したり、講義をきいたりするのだから、ずい分つらかったにちがいない。しかし頑張り屋の彼はその苦勞をものともせずにおし通した。

統計学会で「市場としての農村」という共同レポートをしたのも昭和32年のころである。農家経済調査を丹念に再集計して、農村市場の拡大をあとづけようとしたのであった。西川君がその後も農業生産費の分析に興味をもち、博士論文もそれをテーマにしたのは、このころからのことであった。もっとも勉強ばかりしていたのではない。これも昭和30年ごろだと思うが田中穰二君と三人で、金峯山に登ったことがある。10月はじめのことで、西川君は綿密な性格を発揮し、凡そ考えられる一切の事態に備えて、おそろしく大きなリュックを背負ってあらわれた。麓の金山という部落から、いきなり急坂にかかると、彼は荷の重さでバテてしまい、道は一向はかどらない。結局頂上をきわめたのは4時近く、しかも黒平の方におりかけて沢に迷いこみ、とうとう雨を心配しながら野宿の始末となった。翌朝西川君はリュックから非常食糧のパンやらアルファ米やらをとり出して大装備の威力を示してくれた。次の日は坦々たる高原を塩山の方に下りてきたのだが、その時の写

真はいまも私の手許にあり、若かった日の思い出になっている。

西川君が結婚したのは昭和33年だったと思う。周囲の反対を押し切って結ばれた二人の挙式は、神田の学士会館で行なわれた。私は司会役を仰せつかり、宗教的な形式ぬきで、二人が婚姻届に署名、媒妁の内藤先生御夫妻が連署されるだけの簡素な式のあと、友人連がビールをのみながら二人をサカナに熱をあげた。有沢先生もお見えになり、あたたかいスピーチを下された。

西川君は大学院を終えてのち、芝浦工大に職をえた。かれの地味なしごとが稔りはじめ、経済学博士の学位をえたのはそのころである。小樽商大から助教授として招かれたのはこのあとであった。私はその内談があったことをきき、彼にぜひゆけとすすめ、彼も知遇に感じたとでもいうのか、こころよく赴任した。竹内清氏はその間に熱心に彼に説き、決心をかためさせる努力をされた。増山先生のゼミナール以来の永い友情が西川君の上に注がれているのをまざまざと見る思いがした。

西川君が赴任してまもなく、昭和39年の秋、私は北海道を訪れて彼を官舎にたずねた。奥さんはじめお子さんたちも元気で私をむかえてくれ、おひるを御馳走になった上、いっしょに散歩し、山に上り、コーヒーをのみ、最後には夜汽車で函館に向う私を札幌まで見送ってくれて、いっしょに夕食をして別れたのもなつかしい思い出である。その後、学会や彼の上京の折などに会うことはあっても、ゆっくり一夜を語るような機会がないままに彼はアメリカに留学し、帰らぬ人になってしまったのである。

小樽にうつってからの彼は、学問に専心できる条件と、すぐれた同僚とに恵まれて、着々と業績をあげていった。また管理科学や統計学の講義にもいかに気がはいていたらしいことは、折々の口ぶりからも察しられた。いま、私の机上には、テキサスの彼の研究室から返送された一束の未定稿がある。私はここまで書いてきて、筆が進まなくなるのをおぼえる。そこには彼がようやく到達した仕事の成果と、これからしようとしていた仕事の見取図とが含まれているからである。

その第一は1970年3月の日付がある W.B. Smith 教授との共同論文、および彼の手書きの5つの論文草稿にみられるローテーション・サンプリングにともなう問題の研究であった。そこで彼は、これまでとかく敬遠されてきた標本抽出のさいのローテーションの問題を精密に理論化しようところみ、それに成功しようとしていたのであった。数理統計学の専門家としての彼の面目はこの領域の仕事に明示されるはずだった、と今さらながら思う。

第二に、彼は小樽において管理科学の講義を行ない、あるいは他に概論的な書物をまとめることを考えて、メモをつくっていたようである。そのメモは大きくは4章に分たれていて、

1. Optimization under Certainty
2. Optimization under Uncertainty
3. Control Theory
4. 電子計算機とその応用

となっていた。第1章では極大極小問題から入って、線型、非線型計画法におよび、第2章では確率を導入して情報量を考え、ベイジアン、ミニマックス、ネイマン=ピアソンなどの諸原則を検討し、第3章では変分からターンパイク、自動制御までを扱い、第4章でコンピューターにふれる。管理科学のしろうとである私にはこの体系を評する資格はないが、少なくとも私にはユニークなもののように思われる。そしてその「序論」のメモも一枚だけのこされている。彼はそのなかでいう、「管理科学は人間行動の合理性を追求する学問であって、人間存在の非合理性あるいは不条理を対象とするものでもなければ、それに立脚するものでもない」。……「管理科学の機械的適用に対するいましめ——人間性を忘れた適用は必ず失敗をまねく——“マクナマラ理論のベトナムにおける敗北”」, 「管理科学にひそむ矛盾=“管理する”という行動はすぐれて人間的なものである。だが管理の対象が人間を意味するときはそれは本質的矛盾に逢着する。人間は自らが“管理される”ことに反逆することによって人間性のあかしをたてることができるからである」——かつての社会科学への情熱を、新しい体系に盛込もうとする迫

力を、私はこれらの文章のなかからよみとることができるように思う。

西川君は人生の面でも、学問の面でも、さまざまな曲折を経ながら自分の道を切りひらいてきた。とくに学問の面では、ようやく自分のゆくべき道を、みのり多かったであろうアメリカ留学のなかで見出し、帰国してまさにその花をひらかせようとしたときに倒れたのである。人としての彼は、その明るいはっきりした個性で誰からも愛された。また彼は後輩に対しても思いやりにあつく、彼の世話になった人が多かったことを知っている。その彼が最愛の奥さんと二人の子供さんといっしょになくなる悲運に遭遇した。哀惜、痛恨などという月並なことばではすまされない思いを、私はいかにあらわすべきかを知らない。

ただ一人、彼の遺児が残された。いまは彼のこの世にのこしたただ一人の形見がすこやかに成長することをいのるのみである。

(東京大学教授 46. 12. 2)